



落選和歌集（二）



多谷昇太

もて

青き踏む郎女氏を命たり旅人かしげばをんなわざ  
いらつめうじ をとこ

ああいいな春の川辺に佇めば彼岸ごとしも亡母と  
はは

るませり

主婦ひとり夫子をつれで川堤いく春をあぢはふ但  
つまこ つつみ

馬皇女とぞ  
ひめ

花後光名のみ春をぬくむなり吉野のほほを朱を  
にも染める

白梅としだれ桜のあて姉妹春風にさや舞ひ我さし  
かぜ  
ゑまふ

初燕寒空ながら来たりけり名にし負はば春を呼ぶ  
がね

アメリカと大和んちゆうの勝手なかくもいでた  
りハルサーエイカー（※ハルサーエイカー…沖繩  
の女ウルトラマン）

基地なかにすさぶまいぞゑ島娘きみの情けに芭蕉  
は招く

頭からつまさきまでもマティリアル時代の本音を  
示すが GIRL いま

韓衣裾の悲しび常もかも前の大戦に今の格差に  
からころむ いくさ

払暁は勝ち組ゆや来む鳥澁云ひね驕りの闇に踊る  
ばかりぞ

世に染まぬ宇宙人とか人の云ふあなましかる地  
球のかはづ

かたびらに夜雲しつらへ畏みとあらたまりたり中  
秋名月

るまち月ひとつの星をともしなひて中空なかぞらかかるはさ  
は娶れとや

中秋の名月翔ける日本狼ほろびしもの巻かれ人らにやよ吼えな  
むや

日の本の狼男ルガルーなれば咆哮こゑ高しよみがえりの歌朗々  
満月

雲間よりものしり顔に十三夜弱虫爺の気張るを照  
らす

このすがた！たれか手折らん摘まみなん総身棘アザミな  
る鬼薊アザミ嬢かな

塗りつけてなほ世に染まる青二才わが身で云へば  
古い二才かや

爪切りに動くを得たる老い身かはフレディ長爪た  
だただ憎げば

すべりゆくクォーツ針の速きことカッチカッチと

止めたき老境をりを

雨あしの筆のくはしさえもいはず描きあげたるは  
あぢさゐの家

川沿ひにミルク色なる家しありあぢさゐ尽くしや  
雨が描きゐる

雁ならば我にたがはぬ一羽来ぬしがらみもたずが  
よるしかりとぞ

字あざ尽くしピュグマリオンの女めを造る絵筆ふでには負け  
ぬペン先を見よ

聖日の銀座のカフェゆ街見れば美女と目会ひぬア  
ステリアかな

黒羽織粹に着こなし行く人か銀座目抜きを女将罷  
るの図

女将よき味よき店のつと消へぬ街は木枯らし寂し  
かりけり

写経せば清心妬むこゑひとつカンダタ止めは地獄  
ともなし

波はるか酔ひどれ船を見ましかばいつしか乗りぬ  
おのづからなり

深夜二時山下公園ガスパールただあくがれしかの  
日かの時

：落選和歌集（一）の続編です。これは三大歌誌の歌壇に投稿して（いつものように）落とされた作品集です。入選はおるか一首でも佳作として取られることはありませんでした。ただ落選後この歌集をどうして見たものか知りませんが、また私の電話番号をどうして知り得たものかもわからないのですが、ある人物から電話がかかって来て、「（確かサンケイ新聞でしたか）新聞の一面を使って現代を代表する歌人（確か）10名の作品をそれぞれ10首（？三首？）づつ載せたい。ついてはあなた多谷昇太の作品を載せたいがいかがか」と誘われました。しかしその掲載料が十数万円ほどで私は万年金欠病であり断らざるを得ませんでした。その折の彼のいかにも残念そうなおぶりからして、単なるセールの類の方とは思われなかつた。「頭から爪先までも：」と「女将よき味よき：」を電話口で語んじてみせ、『まったくなんでこんないい作品が選べないのか：』という思念が聞こえた気がしたが、はてここまで云うと誇大妄想の類ですかね…。



「黒羽織粹に着こなし行く人か銀座目抜きを女将罷る  
の囃」(のイメージ、上下2枚とも。この歌自分でも  
気に入ってます)